

想像界の生物相

鷲の王ジャタユ

ふくおか しょうた 福岡 正太
民博 人類基礎理論研究部



資料名	舞踊劇ワヤン・オランの衣装(ジャタユ)
標本番号	H0004154
地域	インドネシア
備考	特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」で展示中(11月26日まで)

*撮影：大道雪代

ジャタユはインド起源の叙事詩『ラーマヤナ』に登場する鷲の王である。魔王ラーヴァナにさらわれたシーター姫を助けようとするが、魔王との戦いに敗れ命を落とす。

◆◆◆ジャタユと魔王の戦い◆◆◆

ラーマ王子は第二王妃の計略によりアヨディヤ国を追われ、妻のシーター姫と弟ラクシュmana王子をともない森に暮らしていた。シーター姫に横恋慕する魔王ラーヴァナは一計を案じて、二人の王子を遠ざけ、その隙に姫をさらってしまう。鷲の王ジャタユがそこにあらわれ、魔王に襲いかかる。しかしジャタユは魔王の武器により翼を切り裂かれて地上に落ち、姫は連れ去られる。姫がいなくなったことに気づいた両王子は姫の行方を捜すうち、瀕死のジャタユを発見する。ジャタユは事情をラーマ王子に伝えると息を引きとり、王子は丁重に鷲の王をとむらい、その魂を昇天させるのだ。

◆◆◆ジャタユの兄、サンパーティ◆◆◆

『ラーマヤナ』において、ジャタユはサンパーティの弟とされる。二人はどちらがより高く飛べるか競い合ううち、太陽に近づきその炎に焼かれそうになる。翼を広げジャタユをかばったサンパーティは、翼を

失ってジャタユと別れ別れになって地上に落ちる。地上に落ちたサンパーティは、苦行者の予言にしたがい、ラーマ王子を助けるべく長いあいだそこにとどまっていた。

◆◆◆インドネシアのジャタユ・鳥◆◆◆

『ラーマヤナ』は東南アジアにも伝わり、原典にはないエピソードや異説を生み出しながら、今日にいたるまで人びとに愛されてきた。インドネシアでは、ジャタユはジャタユ、サンパーティはスパンティとよばれ、ガルダ(ガルダ)とならば航空会社の名称にも使われた。ちなみにガルダは『ラーマヤナ』原典ではジャタユとサンパーティ二人の叔父とされるが、インドネシアでは兄弟として語られることもある。ジャワ島中部の遺跡プランバンで演じられる『ラーマヤナ』舞踊劇やバリ島のケチャなど、二〇世紀に生み出さ

れ観光客にも楽しまれてきている芸能においてもジャタユが登場する。



プランバンに併設された劇場で上演される『ラーマヤナ』舞踊劇において、ラーマ王子とラクシュmana王子にシーター姫誘拐の事情を告げるジャタユ(2009年)

ジャワ島北海岸の町チルボンにある王宮のひとつカノマン王宮には、バクシ・ナガ・リマンとよばれる馬車が伝えられている。バクシは鳥、ナガは蛇、リマンは象の意であり、これらが一体となった生き物が馬車に刻まれている。いずれもヒンドゥーの神話においてしばしば大きな力を発揮する動物である。ジャタユの叔父ガルダはヴィシヌヌ神の乗り物、また父アルナは太陽神スーリアの馬車の御者とされる。『ラーマヤナ』におけるジャタユの活躍なども加わり、王の乗り物に刻むべき動物のひとつとして鳥のイメージが形成されてきたのだろう。

※本稿は特別展図録「驚異と怪異——想像界の生きものたち」に掲載されたコラムに加筆・修正したものです。